

第49回埼玉県民のための“がんの集い”を開催しました。

令和7年1月25日(土)に、「第49回 埼玉県民のための“がんの集い”」をさいたま市のソニックシティ国際会議室において開催しました。

「伝えたい！がんセンターでの先進的な取り組み」を総合テーマとし、4名の診療科医師及び1名の認定看護師が講演しました。

当日は109名の方が来場し、来場者からは「分かりやすい説明でがん治療の現状を知ることができた」、「自分の知らない治療法があることが分かった」、「初めて参加したが、次回も参加したい」等のご感想をいただきました。

今回の「がんの集い」でも、県民の皆様にご覧いただけるよう、埼玉県立がんセンター公式 YouTube チャンネルに講演会の動画を投稿いたしました。ぜひご覧ください。(がんの集い実行委員会)



講演内容・講演者

- 機能温存前立腺がん治療“フォーカル・セラピー”
松岡 陽(泌尿器科 科長兼診療部長)
- 遺伝性乳がん卵巣がん
吉田 玲子(腫瘍診断・予防科 副部長)
- 短期間かつ強力にがんを狙い打つ「定位放射線治療」
工藤 滋弘(放射線治療科 科長兼診療部長)
- 神経内分泌腫瘍における治療の進歩 -PRRT について-
清水 怜(消化器内科 副部長)
- 若年がん患者さん妊孕性温存の公的支援
山本 幸恵(看護部 乳がん看護認定看護師)

図書ボランティア“ひまわり文庫”のご紹介

血液内科に入院された女の子のご家族からのご寄付により始まった「ひまわり文庫」は、診療の待ち時間や入院中にご利用いただけるよう、各病棟・外来・検査室・通院治療センター・会計エリアに一般書(小説や漫画)を取り揃えており、ボランティアの皆さんの活動で成り立っています。ご寄贈いただいた本にブックカバーをかけ、シールを貼り、整理・整頓します。毎月1回すべての本を入れ替えています。活動は毎週木曜日の午後、1時間から2時間程度で、現在約10名の方々が参加してくださっています。興味のある方は是非図書ボランティア活動にご参加ください。

また本のご寄贈も常時受け付けています。ご不明な点は図書館までお問い合わせください。お待ちしております。



がんセンターだより

第74号
令和7年3月発行

〒362-0806

埼玉県北足立郡伊奈町大字小室780

電話番号：048-722-1111(代表)

FAX：048-722-1129

HP：https://www.saitama-pho.jp/saitama-cc/



基本理念「唯惜命」

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、
先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、
がんで苦しむことのない世界をめざします。

発行
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長 影山幸雄

副病院長退任のご挨拶



埼玉県立がんセンター
副病院長

小林 泰文

埼玉県立がんセンター副病院長・小林泰文より退任にあたりご挨拶申し上げます。

私は1994年5月に留学先のシカゴ大学から赴任し、血液内科の臨床と血液腫瘍の細胞遺伝学研究に従事して参りました。2020年4月に副病院長を拝命し、横田病院長、2022

年4月からは影山病院長を補佐して参りました。

副病院長として内科系診療科と通院治療センター、緩和ケアセンター、サルコマセンターなどの部門を担当して参りました。入院せずにごん治療を受けることを希望する患者さんが増加し、60床という全国屈指の規模の通院治療センターにも関わらず治療の待ち時間が長くなっていました。スタッフ一同協力し、少しでも待ち時間を短くできるように努力してきました。緩和ケアセンターでは、緩和ケア病棟での療養だけでなく、患者さんが尊厳をもって住み慣れた地域で安心して療養頂けるように地域緩和ケア提供体制についても進めて参りました。

私と当センターとの出会いは1988年に遡ります。学位論文研究のため当センター染色体研究室に国内留学し、白血病の染色体分析を習得するとともに急性骨髄性白血病の原因遺伝子として世界で初めて埼玉で発見されたAML1(RUNX1)の研究にも参加させて頂きました。1年余りの日立総合病院での勤務を経て、1992年1月から慢性骨髄性白血病の発症に関わる染色体異常を発見したシカ

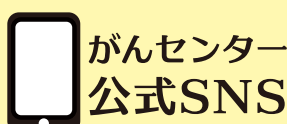
ゴ大学血液・腫瘍科教授、ジャネット・ラウリー博士のもとに留学させていただきました。

当センター赴任後には血液内科の診療に加えて、シカゴ大学で習得した手法を用いて白血病の責任遺伝子の発見を目指した研究を行ってきました。白血病に関連する遺伝子の探索は、病気の診断に役立つだけではなく画期的な新薬の開発につながる可能性があります。例えば、ラウリー博士が発見した染色体異常から見つかった遺伝子産物をターゲットにした薬剤は、不治の病と考えられていた慢性骨髄性白血病を飲み薬だけで治せる病気に変えました。

血液腫瘍関連の遺伝子解析は進歩し、近年では次世代シーケンサーを用いた全ゲノム解析も可能となり、遺伝子変化の詳細が明らかとなってきていますが、1つの薬剤で血液腫瘍を治せる画期的な2つ目の薬剤の開発には至っていません。それでも、染色体・遺伝子変化に基づいて血液腫瘍を分類し、最適な治療法を提案するための「造血器腫瘍パネル検査」がまもなく開始となります。

来年度は出身教室の東京科学大学(旧・東京医科歯科大学)血液内科から2名の若手医師を派遣していただきます。今後は足かけ34年当センターに勤務した経験を生かし、若い先生方が最先端の医療と「命を惜しむ」心をもって一人ひとりの患者さんを中心とした医療を実践できるようにサポートしたいと思っています。

最後に、がんセンターだよりを読んでもらうすべての皆様に心より感謝を申し上げるとともに当センターの将来をこれまでと同様暖かく見守っていただけることをお願いして挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。



X(旧Twitter)

YouTube

当センターは「全診療科予約制」「紹介制」です

詳しくはHPの受診案内をご覧ください

予約受付時間 平日の午前8時30分から午後5時まで

電話番号 048-722-3333(予約専用電話)



腫瘍診断・予防科科長 退任のご挨拶

腫瘍診断・予防科の赤木究でございます。
退任にあたりご挨拶申し上げます。

私は、1997年10月に埼玉県立がんセンター研究所の研究者として、また「がん遺伝子診断・遺伝子治療事業」のプロジェクトリーダーとして着任いたしました。それから、27年という長い時間を埼玉県立がんセンターで過ごさせていただきました。その長い年月を少し振り返ってみたいと思います。

着任当時は、マウスを用いたがん研究と病院内で行う遺伝子検査の立ち上げからスタートしたと記憶しております。特に「がん遺伝子診断・遺伝子治療事業」に関しては、消化器内科の山口研成先生と臨床検査技術部の新井吉子さんの3人で、どんな遺伝子検査を提供することが有意義か、どのような方法で検査を行うかなど、今から思えば、楽しくいろんなことにトライしていたように思います。2002年になると、肺がんに対する分子標的治療薬が使えるようになり、その分子メカニズムが明らかになることにより遺伝子検査の有用性が注目を浴びました。まさに「私たちの出番だ」と、呼吸器内科、胸部外科の先生方と肺がんの遺伝子検査を立ち上げ、肺がんの治療に利用してもらいました。この検査法に関してはASCO（米国臨床腫瘍学会）で発表することができました。

その後、消化器外科、消化器内科、婦人科の先生方と遺伝性腫瘍を探索するためのMSI検査、リンパ腫のモノクローナリティー検査や骨髄移植後キメリズム検査を血液内科の先生方と、皮膚科の先生方とはBRAF遺伝子検査、脳外科の先生方とはMGMTメチレーション検査など、多くの診療科の先生方に遺伝子検査を提供することができ、当センターに遺伝子に対する苦手意識がないような基盤を作ることができたのではないかと考えております。その後、様々な遺伝子検査が保険診療で行われるようになり、がんゲノムプロファイリング検査までもが保険診療となりました。また、この検査を実施するために必要な厚生労働省の「がんゲノム医療関連施設」の指定を受けるべく奔走いたしました。結果として、2019年9月に、当時は全国34施設しか指定されていない「がんゲノム医療拠点病院」に選ばれることができました。

こうして振り返ると充実した埼玉県立がんセンターでの生活だったなと感慨深く思っております。一緒に働いていただいた方々に、改めて感謝申し上げます。



腫瘍診断・予防科
科長

赤木 究



臨床腫瘍研究所 日本小児血液・がん学会W受賞！

臨床腫瘍研究所の迎恭輔と小貫律子が、医学系学会である「2024年度 日本小児血液・がん学会 学術集会」において「学術賞（迎恭輔）」と「優秀演題賞（小貫律子）」を受賞しました。

学術賞は、小児血液・がん分野における秀でた学術研究を顕彰することで、研究意欲を高め、小児血液・がん分野の学術の発展を図ることを目的とするもので、今回の受賞は、「Development of an osteosarcoma model with MYCN amplification and TP53 mutation in hiPS cell-derived neural crest cells」における成果が高く評価されたものです。本研究の内容は、TP53変異を有する Li-Fraumeni 症候群患者由来 iPSC細胞（iPSC）から間葉系幹細胞の前駆細胞である頭部神経堤細胞（cNCC）に分化させ、がん遺伝子である MYCN を高発現させることで、人工的な腫瘍化を試みたものです。TP53 変異 /MYCN 高発現細胞から、足場非依存的な形質転換クローンを単離し、免疫不全マウスの副腎近傍脂肪組織に注入したところ、軟骨芽細胞型骨肉腫を発生させました。骨肉腫の由来のひとつとして cNCC が考えられていることから、本研究によって、その証拠を明示しました。本研究を応用することで、ヒト iPSC 由来の前駆細胞を用いた遺伝子改変や in vitro での形質転換による様々な腫瘍モデルの開発に有用なツールを提供することが可能になります。

また「Exploration of telomere maintenance mechanism and its associated genetic abnormalities in 321 neuroblastomas (JCCG-JNBSG)」という演題が優秀演題賞講演に採択されました。本研究は、神経芽腫 321 例についてテロメア維持機構異常をc-circle アッセイを用いて解析し、テロメア維持機構に異常がみられた症例については、テロメア維持機構に関連する遺伝子異常の探索を行ったものです。この研究では、FISHやqPCR、CGH+SNPアレイなどの実験から遺伝子変異を検出し、検出されなかった症例については、当センターが参加している、

小児がんの全ゲノム解析プロジェクトにより得られた WGS データと RNA-seq データを用いて、遺伝子異常の検出と検証を行いました。本研究の結果が、神経芽腫の次世代マーカーの抽出に繋がることが期待されます。

今回の受賞を新たな出発点とし、今後もがん研究をさらに深め、多くの方々に貢献できるよう精進してまいります。



▲授賞式 迎恭輔（左から二番目）



▲小貫律子（左）